

壁内転移を認めたリンパ節転移陰性表在食道癌の2例

名古屋第一赤十字病院外科¹⁾ 病理部²⁾

安江 敦¹⁾ 宮田 完志¹⁾ 湯浅 典博¹⁾ 竹内 英司¹⁾ 後藤 康友¹⁾
三宅 秀夫¹⁾ 永井 英雅¹⁾ 小林陽一郎¹⁾ 伊藤 雅文²⁾

Two Cases of Superficial Esophageal Cancer without Lymph Node Metastasis Associated with Intramural Metastasis

Atushi YASUE¹⁾, Kanji MIYATA¹⁾, Norihiro YUASA¹⁾, Eiji TAKEUCHI¹⁾, Yasutomo GOTO¹⁾,
Hideo MIYAKE¹⁾, Hidemasa NAGAI¹⁾, Yoichiro KOBAYASHI¹⁾ and Masafumi ITO²⁾

¹⁾Department of Surgery, ²⁾Department of Pathology, Japanese Red Cross Nagoya Daiichi Hospital

Key words: 食道癌、表在癌、壁内転移

はじめに

食道癌の特徴的な進展様式の一つに壁内転移があり、その頻度は切除例の7.0-26%と報告されている¹⁾⁻¹³⁾。一般に壁内転移陽性食道癌は高度なリンパ節転移、リンパ管侵襲を伴うことが多く、その予後は不良である²⁾⁻⁷⁾⁹⁾⁻¹¹⁾¹³⁾¹⁴⁾。表在癌あるいはリンパ節転移陰性例における壁内転移の報告は少ない。我々は壁内転移を伴うリンパ節転移陰性表在食道癌を2例経験したので、考察を加えて報告する。

症 例

症例1: 72歳、女性。

主 訴: 上腹部不快感。

既往歴: 特記事項なし。

現病歴: 平成5年4月、上腹部不快感があり、近医の上部消化管内視鏡検査で食道に異常を指摘された。

血液検査成績: 血算、生化学、腫瘍マーカーに異常値は認めなかった。

上部消化管内視鏡検査 (図1): 切歯列より26 cmの食道後壁に粘膜下腫瘍様の隆起を認め、その肛門側に平皿状の低い隆起と随伴する不整なびらん面を認めた。ヨード染色で肛門側の病変は不染帯を呈したが、口側の粘膜下腫瘍様の隆起は染色された。肛門側の病変からの生検で扁平上皮癌と診断された。平成5年6月、右開胸・開腹、胸部食道亜全摘及び胸部・腹部

2領域リンパ節郭清、高位胸腔内食道胃管吻合を施行した。

切除標本肉眼所見 (図2): 胸部中部食道後壁に平皿状の低い隆起と随伴する不整なびらん面(0-Ipl+Iic)を認め、その口側1.5 cmに表面平滑な粘膜下腫瘍様の隆起を認めた。

病理組織学的所見 (図3): 肛門側の病変は粘膜から粘膜下層まで浸潤する異型扁平上皮癌となり、深達度pT1b(sm3)の低分化型扁平上皮癌と診断された。口側の粘膜下腫瘍様隆起は粘膜固有層に存在する異型扁平上皮で、表面上皮は正常であったため、壁内転移巣と考えら

図1. 症例1の上部消化管内視鏡検査所見。切歯列より26 cmの食道後壁に粘膜下腫瘍様の隆起を認め、その肛門側に平皿状の低い隆起と随伴する不整なびらん面を認める。



